

「ヨセフとポティファル」

2021年06月09日

主人は、「あなたの僕が私にこんなことをしたのです」と告げる妻の言葉を聞いて怒った。ヨセフの主人は彼を捕らえ、王の囚人がつながれている牢獄に入れた。彼はこうして、牢獄にいたることになった。(創世記 39 章 19 節～20 節)

ヨセフは兄たちに殺されそうになったが、命は助けられ、イシュマエル人の隊商に売られた。隊商は彼をエジプトに連れて行き、ファラオの親衛隊長ポティファルに売り渡した。

著者は、ヨセフのエジプトでの第二の人生を、「主がヨセフと共におられた」と書き出している。「神が共におられた」という事実がヨセフの生涯を貫いている。ヨセフは父ヤコブの家では、周りの事情に疎く、目は自分にしか向いていなかったが、奴隷生活の苦難の中で、置かれた状況を理解し、なすべきこととしてはならないことを判別できる人間に成長した。神が共におられ、ヨセフのなすことが順調に運んでいるのを見て、主人ポティファルは、家の管理、畑、財産の全てを任せた。神はヨセフのゆえに、ポティファルの家を祝福されたので、彼は自分の食べ物のほかは、ヨセフに任せきりにするほどの信頼を寄せた。

ヨセフは顔も美しく、体つきも優れていた。美男美女は、思わぬ災難を受けることがあるが、ヨセフもポティファルの妻から「私と寝なさい」と誘惑を受けた。彼は彼女の誘惑を拒んで、言った。主人は私を信頼し、全てを私の手に委ね、この家では私の上に立つ者はなく、私に禁じられているものは何一つありません。ただあなたは別です。あなたは主人の妻ですから、どうしてそのような大それた悪事を働き、神に罪を犯すことができますよう、と。彼女は毎日ヨセフに言い寄ったが、彼は彼女のそばで寝ることも、一緒にいることも聞き入れなかった。してはならないことを、はっきりわきまえていた。

ヨセフがいつものように、仕事をしようと家に入ると、中には誰もいなかった。ポティファルの妻は、ヨセフの服を掴んで、「私と一緒に寝なさい」と激しく迫った。ヨセフは、服を彼女の手に残し、外へ逃げ出した。すると彼女は、家の者を呼び寄せ、「見てごらん。主人がヘブライ人の男を連れて来たから、私たちが弄ばれるのです。あの男が私と寝ようと私のところに来たので、私は大声で叫びました。私が声を上げて叫んだのを聞いて、男は私のそばに服を残したまま外へ逃げていきました」と叫んだ。拒絶されたので、憎しみに反転したのである。ヨセフの服を取っておき、主人ポティファルにも、ヘブライ人の僕が私を弄ぼうとした。この服がその証拠だと言い張った。「ヘブライ人」とは「国境を越えて来た者」という意味で、イスラエル人を他民族に紹介する時に用いた言葉であるが、妻は「よそ者」という軽蔑を込めて使っている。ポティファルは妻の言葉を聞いて怒った。ヨセフを捕らえ、王の囚人がつながれている牢獄に入れた。ヨセフは、潔白であったが、濡れ衣を着せられ、ポティファルの妻によって、獄中生活を強いられることになった。ポティファルは信頼していたのに、裏切られたことを怒ったのであるが、その後、ヨセフを信頼した行動を取っている。妻の言葉に不信を持っていたようにも思える。また、ポティファルは宦官であったと想像する説もある。聖書は、説明が十分でないので、多様な想像を生み出している。それも、聖書を更に、面白くするのではないか。

冤罪によって獄中生活を強いられたヨセフは、神が共におられ、慈しみを示された。牢獄長の目に適い、獄にいる囚人たちをヨセフに取り仕切るようにさせ、何ら目を配る必要がないほどであった。共にいる神がヨセフのなす事を順調に運ぶようにされたのである。